

KALS NEWSLETTER 53

2016年6月
九州アメリカ文学会
事務局 佐賀大学全学教育機構内
佐賀市本庄町1
〒840-8502

「第 62 回九州アメリカ文学会シンポジウムを終えて」

藤野 功一（西南学院大学）

今回のシンポジウム「アメリカ大衆文学とモダニズム」では、20世紀前半にアメリカ大衆文学の女性化が進む中、男性モダニズム作家たちが、あえて新聞や雑誌で話題となるような男らしい自己像を演出し、高尚で知的な文学を書く作家としての地位を確立してゆくという図式から出発して、フォークナー、ヘミングウェイ、フィッツジェラルド、そしてスタインベックらの作品の再検討を行った。アメリカにおける大衆文学とモダニズムの関係をさぐるという課題に、さらに男らしさ、女らしさというジェンダーの問題もからめたため、シンポジウムが全体として纏まりのあるものになるかどうか不安だったのだが、北九州高専の中村嘉雄先生、鹿児島大学の千代田夏夫先生、そして招聘講師として関西学院大学の塚田幸光先生という優れた講師陣の方々からそれぞれ興味深い発表をしていただき、さらに質疑応答では時間いっぱいまで参加者の方々からのご質問、ご意見を得て、このテーマが示唆する具体的な問題についての活発な議論を行うことができた。

シンポジウム終了後に思い返してみると、企画の段階で「大衆」とは何かという定義をしなかったため、シンポジウムではそれぞれの発表者が「大衆」という言葉に自分なりの定義や枠組みを与えることとなった。それらを司会者の側で簡便な言葉に要約することができなかったために、議論の焦点が定まりにくかったように思う。ここでは、それぞれの発表者の思い描いていた「大衆」の姿がどのようなものであり、それぞれにどう繋がりうるかを私なりにはっきりさせてみて、今後の考察をさらに深めるための一つの手がかりとしてみたい。まず藤野の発表では、大衆は「情報の拡大再生産」を楽しむ存在である。1920年代から30年代初頭における大衆市場の拡大とマスメディアの普及によって、大衆は様々な情報の増幅を楽しむようになった。男はさらに男らしく、女性はさらに女性らしく報道され、単純な事実ではなく、そこに想像力が加えられて増幅した情報を大衆が楽しみ、消費することとなった。このような情報の拡大と再生産は、もちろん、憎悪や恐怖の対象を拡大再生産する事にもつながるだろう。大衆はみずからの憎むもの、恐怖するものをより誇張し、しかもそれを排除の対象とすることで、かえって自らのアイデンティティを確立しようとする欲望を持った存在でもある。このような大衆の「憎しみの増幅と排除」の傾

向というのは、中村先生が発表されたように、ヘミングウェイの『日はまた昇る』におけるコーンについての記述にも如実に表現されているだろう。

いわば大衆とは、ある特定の表象が増幅され、拡大再生産する過程で生み出される存在とも考えられる。たとえば特に19世紀以来のアメリカ国民（特に南部の白人男性がその典型かもしれない）の多くは、広く流布していたサー・ウォルター・スコットのロマンスに描かれた登場人物という表象を、理想的な自己像としていた。そうであればこそ、千代田先生の論じるように、ゴシック的要素までも含む「ロマンスと大衆」の強いつながりは、第一次世界大戦に参加することのできなかったフィッツジェラルドとその文学に屈折と葛藤を与える重要な前提となったと言える。また、このようなヨーロッパ的ロマンスによって拡大再生産されるアメリカ中産階級の価値観に対する強烈なアンチテーゼとして表象された大衆像が、ウォーカー・エヴァンズとジェームズ・エイジーによる『我らが有名人を讃えよう』と、スタインベックの『怒りの葡萄』であるだろう。これらの作品によって大きく取り上げられることになった特定の地域（アラバマとオクラホマ）の貧民は、塚田先生の論じるように、1940年代に「困難に立ち向かう強き大衆」という新たな表象として確立されたと言える。

大衆とは本来、多様な特徴をもつ様々な人々の集団であるはずだが、それぞれの時代と社会状況によってある特徴が拡大再生産され、あたかもそれがあらゆる大衆に当てはまるものであるかのように示される。そして、みずからを大衆とは一線を画する存在として認識していたモダニズム作家たちも、大衆の表象と、それが指し示す大衆の欲望（あるいは、大衆の自己認識）とは無縁でいられるはずがなかったというのが、今回のシンポジウムの大筋であったのではないだろうか。企画者自身が、大衆とは何かについての定義をはっきりとさせることができていなかったにもかかわらず、大衆とそれが生み出す文学や文化とモダニズムの関係についての多方面からの考察ができたのは、ひとえに講師の先生方と参加者の方々のご理解とご協力のおかげである。この場を借りて心から感謝を申し上げたい。

地区便り

<佐賀地区>

佐賀大学 名本達也

今年から九州アメリカ文学会の事務局を佐賀大学が担当することになりました（これまで3年間、西南学院大学の先生方におかれましては大変ご苦労さまでした）。会長・事務局長ともども一丸となって馬車馬のように働かせていただく所存です。

それから、紙面を少しお借りして、ヘンリー・ジェイムズ研究会の宣伝をさせていただきたいと思えます。現在、ジェイムズ研究会には、31名の会員が登録されておりますが、そのうち九州支部の会員は、6名です。もともと九州でご活躍をされていた方々を含めると、その数はさらに大きくなります。今年、ジェイムズ没後百年を迎え、同研究会では論文集『ヘンリー・ジェイムズ、いまー没後百年記念論集ー』（英宝社）を出版致しますが、九州支部からは齊藤園子先生（北九州市立

大学)、志水智子先生(九州産業大学)、砂川典子先生(九州ルーテル学院大学)、そして私の4名が寄稿しております。この四半世紀において、九州支部はジェイムズ研究が最も盛んな時期を迎えているのではないかと嬉しく思っております。同書が、ジェイムズ研究の一助になればと願っております。

<熊本地区>

熊本大学 池田志郎

前回報告以降の熊本アメリカ文学研究会の活動をご報告いたします。この研究会の中心は九州アメリカ文学会の熊本在住の会員ですが、アメリカ文学・アメリカ文化に関心のある方ならどなたでも参加できる地域開放型の研究会です。各人の研究成果や蘊蓄を披露する場でもあり、毎回、研究者以外の方も参加されていて、楽しい雰囲気です。

○131回(2015年11月28日)熊本大学にて

題目: *Passing* by Nella Larsen

発表者: 原口 昌子 (熊本大学非常勤講師)

司会者: 濱田 比呂美 (熊本大学非常勤講師)

*Nella Larsen の *Passing* という興味深い小説についての発表でした。そもそも”passing”とはどういう意味なのかや、われわれ自身の中にある偏見についても活発な意見が交わされました。また、最後の場面は自殺なのか他殺なのか、参加者からも様々な分析がなされました。どう考えたらよいのか、それによって作品の持つ意味はどう変わってくるのか、しかし、作品の持つ意味とは何なのか、その意味を誰が決定できるのか、決定しなければならないのか、など読者の役割についての根源的な問いにまで発展し、結論は出ないまでも、参加者全員が充実感に満たされた回になりました。なお、引き続き、会場を変えて、少し早目の忘年会となり、さらに親睦を深めることができました。

○132回(2016年2月20日)熊本大学にて

題目: John Steinbeck の *America and Americans* (1966)

——Steinbeck が説く普遍的な真実

発表者: 馬渡 美幸 (熊本大学非常勤講師)

司会者: 池田 志郎 (熊本大学)

*スタインベックがご専門の馬渡先生の *America and Americans* についてのご発表でした。現在に通じる問題提起があることなどが指摘されました。格差社会や教育の問題について参加者からも意見が出され、大統領選についてもトランプ候補が話題になりました。スタインベックはアメリカに希望を持っていること、批判力・観察力があることが例示され、納得させられました。二年後に亡くなる作者の遺言だったのでは、という指摘も興味深かったです。

○第 133 回（2016 年 4 月 23 日）は熊本大地震の影響で延期しております。

最後になりましたが、熊本大地震の際には会長はじめ会員のみなさまからのお見舞いと励ましのメール、ありがとうございました。熊本の会員の中にも大きな被害を受けた方もいらっしゃるので、熊本地区での研究会の再開はもう少し先になりそうです。熊本大学の建物も被害が出ており、事務室や研究室を移動したりしている部署もあります。また、附属小学校は特に被害が大きく、建て替えも含めての検討が必要なようです。熊本大学の五高記念館も屋根の煙突部分が何箇所か落下し、立ち入り禁止になっております。重要文化財に指定されておりますので、補修もままならず、なおかつ、危険度が高いためにいまだブルーシートも掛けられておりません。また、熊本学園大学も建物被害が出ており、授業教室を変更したりしています。学園大学の避難所としての役割はいまだ続いています。また、ご存じの通り、東海大学の阿蘇キャンパスは使用不能になっておりますので、熊本キャンパスでの特別時間割での授業が計画されているようです。九州ルーテル学院大学のキャンパスも危険箇所があるようです。どの大学の学生たちにも被災者がいるので、授業の進め方にも気を使いますし、授業中の余震にも注意が必要な状態が続いています。これからの梅雨も心配です。文学がこのような時に何ができるかも考える必要があります。

<鹿児島地区>

鹿児島大学 千代田夏夫

鹿児島支部からのお知らせです。まずは鹿児島女子短期大学の高島まり子先生が 3 月無事ご退職を迎えられました。ナサニエル・ホーソン協会九州支部研究会長のお役目は近畿大学の青井格先生へ、しかし文科省補助事業の COC+ に関連して、鹿児島女子短大の COC+ コーディネーターとして週に 3 日はご出勤で、地域連携センター室にいらっしゃいます。5 月 27 日・28 日のホーソン学会では、総合司会を務められました。そして高島先生のご後任には生田和也先生がご着任、KALS でもお馴染みの気鋭のホーソン研究者でいらっしゃいます。ホーソン支部会のみならず鹿児島のアメリカ文学研究の世界がまた華やかになりました。鹿児島大学名誉教授の千葉義也先生はヘミングウェイ協会『NEWSLETTER』に「ジェイムズ・ネイゲル教授を訪ねた頃——日本ヘミングウェイ協会創立前」をご寄稿、いつに変わらぬご健筆です。鹿児島大学の竹内勝徳先生と鹿児島県立短期大学の小林朋子先生は竹内勝徳／高橋勤編著『身体と情動—アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』（彩流社）でそれぞれ「まえがき」「エイハブの脚—メルヴィルにおける身体論の可能性」、
「流動する集団的パロール—『ブレイク』における身ぶりと音楽」をご執筆、また本書の出版に合わせて 3 月に開催された、日本ナサニエル・ホーソン協会第 62 回九州支部研究会シンポジウム「アメリカン・ルネサンスにおける情動と身体」では、竹内先生が「ホーソンにおける口述性—アフェクト研究の観点から」小林先生が「認識論的暴力に対抗する—『ブレイク、あるいはアメリカのあばら家』に見る前言語的表現」と題したパネルを務められ、いよいよ充実のご活躍です。鹿児島国際大学の森孝晴先生は、本年 4 月より鹿

児島国際大学大学院国際文化研究科の研究科長代理に就任されました。昨年度の講演回数は実に16回を数えられたよし、うち15回は長沢鼎関係、残りの一つはアメリカ小説関係とのご報告です。『考古学ミュージアム調査研究報告13』には「ジャック・ロンドンと椋鳩十——新資料を読む」をご寄稿、6月刊行の『ジャック・ロンドン研究第3号』（日本ジャック・ロンドン協会）には〈翻訳および付記〉として、ジャック・ロンドン著「コサック兵は戦い、そして退却した」が掲載されます。同誌には鹿児島国際大学大学院国際文化研究科博士後期課程の院生さん二人のジャック・ロンドン論も掲載予定、このお二人は6月18日に名古屋で開催される日本ジャック・ロンドン協会第24回年次大会で研究発表もなされます。同大学院博士後期課程には今春もうお一人ロンドンを研究する院生さんが入学され、鹿児島のロンドン研究はますます盛んです。千代田は「高等教育における中等教育指導法のあり方—米国文学とジェンダー・セクシュアリティ問題を教材として」（大学英語教育学会（JACET）第54回国際大会）「ゴシックとして読むF・スコット・フィッツジェラルド」（九州アメリカ文学会12月例会）「The Great Race—*The Great Gatsby*—人種主義から読む『グレート・ギャツビー』」（日本F・スコット・フィッツジェラルド協会第3回九州・中四国研究会）を発表、また5月のKALS大会ではシンポジウム「アメリカ大衆文学とモダニズム」にて「フィッツジェラルドにおけるゴシック性と大衆性」と題したパネルを務めさせていただきました。また「F・スコット・フィッツジェラルド作品における肖像画のイメージ—ゴシック的アプローチを通して」「ゴシックにおける意味と形式、モチーフ群についての一考察—Day, Kilgourの著作を中心に」「高等教育における中等教育英語科指導法のあり方—教材としての米国文学とジェンダー・セクシュアリティ問題をを通して—」の三篇を学内紀要に投稿いたしました。

事務局からのお知らせ

1. 2016年度日本アメリカ文学会第55回全国大会は10月1～2日、岡山のノートルダム清心女子大学で開催されます。
2. 日本英文学会第69回九州支部大会は10月22～23日、福岡の中村学園大学で開催されます。
3. 九州アメリカ文学会第63回大会は2017年5月13～14日、佐賀大学で開催されます。
4. この5月より事務局が佐賀大学(下記の住所)に移転しました。

〒840-8502

佐賀市本庄町1 佐賀大学全学教育機構内

九州アメリカ文学会 TEL (0952) 28-8295

会費に関する問い合わせは名本達也(namotot@cc.saga-u.ac.jp)、

会費以外の件に関する問い合わせは鈴木繁(suzukis@cc.saga-u.ac.jp)

までお願いいたします。

(鈴木 繁)

2016年度役員・委員名簿

変更を下線で示す

会 顧	長 問	早瀬 博範 (佐賀大) 橋口 保夫 野口 健司 野田 壽 安河内 英光 山里 勝己 (名桜大) 小谷 耕二 (九州大)
事 務 局 幹	長 事	<u>鈴木 繁</u> (佐賀大) <例会担当> <u>大島 由起子</u> (福岡大) <例会担当> <u>下條 恵子</u> (九州大) <大会担当>高橋 勤 (九州大) <九州アメリカ文学賞担当> 高橋 美知子 (福岡大) <ニュースレター担当> <u>銅堂 恵美子</u> (福岡大)
会 監 編 集 委 員 本 部 代 議 員	計 査 長 員	<u>名本 達也</u> (佐賀大) <u>秋好 礼子</u> (福岡大) <u>前田 譲治</u> (北九州市立大) 早瀬 博範 <u>鈴木 繁</u>
		本部大会運営委員 <u>光富 省吾</u> (福岡大) 本部編集委員 (支部選出) 渡邊 真理子 (西九州大) 本部サイト運営委員 岡本 太助 (九州大)
編 集 委 員		<u>前田 譲治</u> <u>齊藤 園子</u> (北九州市立大) <u>大野 瀬津子</u> (九州工業大) <u>肥川 絹代</u> (近畿大) Scott Pugh (西南学院大) David Farnell (福岡大) <u>Wayne Arnold</u> (北九州市立大)
地 区 委 員		前田 譲治 <u>名本 達也</u> 山田 健太郎 (県立長崎シーボルト大) 池田 志郎 (熊本大) 雲 和子 (大分大) 井崎 浩 (宮崎大) 千代田夏夫 (鹿児島大) 喜納 育江 (琉球大)

支部サイト運営委員 岡本 太助
藤野 功一（西南学院大）

2016年度年間行事予定(案)

- 3月31日(木) 日本アメリカ文学会第55回全国大会発表者応募締切
- 4月上旬 日本アメリカ文学会第55回全国大会応募者選考
- 4月中旬 九州アメリカ文学会第62回大会プログラム発送
- 4月30日(土) 『九州アメリカ文学』57号原稿応募締切
- 5月7日(土) 九州アメリカ文学会第62回大会(九州大学伊都キャンパス)
研究発表、総会、講演会、懇親会
- 8日(日) 同上 シンポジウム
- 6月下旬 *KALS NEWSLETTER* 53号発行/発送
- 8月中旬 第1回例会案内発送
- 9月上旬 第1回例会(未定)
- 10月1日(土) 日本アメリカ文学会第55回全国大会(ノートルダム清心女子大学)
- 2日(日) 同上
- 10月22日(土) 日本英文学会第69回九州支部大会(中村学園大学)
「アメリカ文学部門シンポジウム」
- 23日(日) 同上
- 11月上旬 第2回例会・忘年会の案内発送
- 11月下旬 『九州アメリカ文学』57号発行/発送
KALS NEWSLETTER 54号発行/発送
- 12月上旬 第2回例会(未定)、忘年会
- 2017年
- 2月20日(月) 九州アメリカ文学会第63回大会発表者応募締切
- 2月下旬 九州アメリカ文学会役員会・文学賞選考委員会の案内発送
- 2月20日(月) 九州アメリカ文学賞 応募締切
九州アメリカ文学出版助成金応募締切
- 3月上旬 九州アメリカ文学会役員会(佐賀大学)
出版助成金選考/九州アメリカ文学会第63回大会発表者決定
九州アメリカ文学賞選考委員会
- 3月31日(金) 日本アメリカ文学会第56回全国大会発表者応募締切

- 4月上旬 日本アメリカ文学会第56回全国大会応募者選考
- 4月中旬 九州アメリカ文学会第63回大会プログラム発送
- 4月30日(日) 『九州アメリカ文学』58号原稿応募締切
- 5月13日(土) 九州アメリカ文学会第63回大会(佐賀大学)
総会、九州アメリカ文学賞・出版助成金受賞式、懇親会
- 14日(日) 同上 シンポジウム

以上